

意見聴取内容概略

| |
|--|
| <p>河合 隼雄（文化庁長官）＜日時・場所：7/22（金）・京都国立博物館内文化庁分室＞</p> <p>『「つながり」を実感できる体験活動を』</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 子どもたちが命の大切さを実感するための一番の根本は親子関係にあるため、学校教育で「命の大切さ」を伝えていくことは大変難しい。また言葉の上で「命は大切である」と伝えても意味がないことを教える側はわきまえておかねばならない。 2 例えばいろいろ端に人が自然に集まっていた昔の生活に戻るような体験（キャンプや合宿など寝食を共にする体験や飯盒炊さんのような「生の命」と接触する体験）をすることが必要。 3 小・中学生を主人公にした「命の大切さ」に関わる映画を観て話し合い、そこで出た感想などを記録・研究する。そうして積み重ねていったものを授業に活用する。 4 体験活動を生かしていくには、子どもと関わる大人の存在が重要である。 5 人と人がつながるといえることを実感することが大切で、そうした実感と教材とをつなぐ。 |
| <p>高木 慶子（英知大学教授）＜日時・場所：7/14（木）・英知大学＞</p> <p>『感性を豊かにする体験学習の大切さ』</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 子どもは大人社会の結晶であり、環境から子どもは学んでいく。 2 命は大切にしないと限界があるもので、その時その時を大切に生きる。こうした命に対する感性を大人が磨いていかなければならない。 3 豊かな人間性を持った教師こそが、子どもの人間性を育むことができる。心豊かに生きるとはどういうことかを考える研修が必須である。 4 命の教育は全ての教科でできるといえることを、全ての先生が理解していろんなアイデアを出して取り組む必要がある。豊かな体験学習は命の大切さについて多くのことを伝えてくれる。 5 「いのちの尊さ」は教えられて理解するものではなく、自分の存在を肯定されることによって、体験・体得するものである。 |
| <p>日野原 重明（聖路加国際病院理事長）＜日時・場所：8/21・神戸新聞松方ホール＞</p> <p>『「命の使い方」についてともに考える』</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 子ども時代の「人との出会い」は豊かな感性を育む。大人は子どもにとっての重要な環境であるということを実感しなければならない。 2 人間の環境も子どもたちの教育には不可欠なものである。感性を育むことのできる人間関係や人的環境を子どもたちのためにつくる。 3 時間を子どもに提供するということが非常に大切である。親と子どもがお互いに問題解決をしようとする。その姿勢こそが教育である。 4 目には見えない命の大切さを実感させるには、目に見える形でのモデル、つまり命を大切に使っているモデルを見せることも大事である。 |
| <p>養老 孟司（東京大学名誉教授）＜日時・場所：8/6・ホテル日航姫路＞</p> <p>『「命の大切さ」は人としての生き方そのもの』</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 多様性を認めない「都会」の人の考え方では、「かけがえのない命」「命の大切さ」という言葉は、空（カラ）の言葉にしか聞こえない。 2 根本的には「命を大切にする」というのは言葉にするときれいだけれど、結構難しいことである。なぜなら死は人間が一番見たがらないものだからである。 3 一つ一つがかけがえがない存在であるのに、一括してまとめてしまう考え方が一番命を大切にするとすることに反する。 4 子どもたちに「生物の多様性」に気づかせるようにするなど、感覚でとらえられるものはみんな違うものであるということ、を、「教える」というより、どのように「身に付け」させるかを考える必要がある。 5 簡単に人を壊すことはできるけれど、人を簡単に元に戻すことはできない。その不可逆性を教えることが必要である。 6 教師自身が「命の大切さ」をどう思うかということが一番大事である。「命の大切さ」というのは、人としての生き方そのものである。教師自身が日頃どう生きているか、自分がどう生きているかを問いかけること、そのこと自体が命の大切さである。 |